

天の父なる神さま、神の言葉に耳を傾ける幸いな時を感謝します。どうか、聖霊が私たちの心を照らしてください。そして、御言葉と共に働く聖霊の導きの中、この礼拝のうちに私たちが生けるキリストと出会うことができますように。救い主、キリスト・イエスのお名前によって祈ります。 アーメン。

1. 道を閉ざす神

1 節から 5 節は、文脈を確認したいと願ひ、朗読していただきました。今日は特に 6-10 節に目を留めます。

まずは 6-8 節（読む）

6 節「みことばを語ることを聖霊によって禁じられた」とは、驚くべき一言です。使徒 2 章で 3000 人が悔い改めて洗礼を受けたのを皮切りに、以来、福音がひたすらに前進していく。そのように前向きな使徒の働きの流れを何だか留めるかのような、そんな 6 節であったと思うのです。もちろん 7-8 章の迫害、12 章のヤコブの殉教等、これまでも逆境はありました。しかし、御言葉の宣教に関しては滞ったことがなかった。それなのに、ここに来て、御言葉を語ることを、聖霊ご自身が禁じた。これはどういうことでしょうか。

6 節で言うアジアは、今のトルコの南です。すぐ前にパウロ一行が訪れたデルベ、リステラからも近い位置にある。そのため、当然次の場所はアジアと思われるところですが、どういうわけか、その道は閉ざされていく。

道を閉ざされた一行は、今度はビティニア、トルコの北を目指します。されど、その道もまた閉ざされてしまう。いったい何が起こったのでしょうか。この箇所は、実は何かと謎が多いのです。第一に、パウロ一行の計画がどのように閉ざされたのかがよく分からない。ハッキリと、聖霊によって禁じられたと分かる方法だったのか。それとも、すぐには分からない方法だったのか…。その他、6 節では聖霊によって、7 節ではイエスの御霊によってと書き分けられているのも謎です。6 節と 7 節では禁じ方が違ったのでしょうか。

ただ、そんな中、一つだけハッキリしていることがあります。それは信仰者の内に住む聖霊が、時に道を閉ざすお方なのだということ。聖霊によるものと、すぐに分かるかどうかは別にして、聖霊は、人生において、道を閉ざすことのあるお方。これは心に留めておくべきでしょう。なぜなら、道を閉ざされた時、人は落胆するからです。特に良いと思われる計画が思いがけずストップすると、人はまず動揺する。「なぜ、どうして」と。さらには神への不信から後ろ向きになる人もあるでしょう。道が閉ざされ、足踏みさせられる時、人は意外に脆くて弱いもの。ですから、聖霊によって道が閉ざされる事があると知ることは、私たちの信仰生活における、一つの備えとなるはずで

宣教師の大先輩パウロと同じく、私もかつて宣教師でした。海外で汗を流した十四年と少

しの間、度々、道を閉ざされる経験をして来ました。派遣当初は開拓伝道を志したのですが、行こうとする道がことごとく閉ざされていく。ようやく協力者を得て開拓伝道をスタートしたのは、台湾に渡って八年後のこと。難度も道を阻まれながらの難産でした。外国人の私と妻は、しばしば文化と言葉の壁に阻まれ、私も度々気持ちが後ろ向きになった。

そんな自分の脆さ、弱さに照らしても思うのです。神が、時に道を閉ざすことのあるお方と知ることは大切です。このことを知ると、私たちの信仰生活に違う物事の捉え方が生まれてくるのです。

2. 導きを求めて

道を閉ざされたパウロ一行が、それをどのように受け止めたのか。これもまた、実は、この箇所における謎の一つです。しかし一つだけ分かることがある。それは彼らが、道を閉ざされながらも、御言葉を語る場所を求めて前に進もうとしたということです。とにかく前に、道が開かれる所を求めて、前に進もうとしている。

こうしたパウロたちの姿は、私たちの人生の縮図です。閉ざされても、躓いても、それでも導きを求めて前を目指す。そんな姿は、信仰者の生き方がどのようなものかを物語っているように思う。

私は今、人生の縮図と言いました。ひょっとしたら、この短い箇所を読みながら、計画の躓きと言っても、わずか数日だったのではないか。それを人生の縮図とは、少し大げさと感じた方もあるかもしれません。でも、ご存知でしたか。一行がすぐ前に訪れた町リステラから、最後に辿り着くトロアスまでの道のりは何と 800 キロ。東京を起点に、パウロと同じく西に 800 キロとなれば、何と広島県にまで至ろうという長さです。実に長いのです。道が開かれる所を求めて旅したパウロ一行の様子を思えば、彼らは間違いなく一月以上、歩き続けたことでしょう。そうした旅の中、彼らは何度も祈ったでしょう。そして学んだにちがいない。人の計画には限界がある。事を大きく動かせるのは、ただ神の御手だけなのだ。

パウロに限らず、信仰者は誰も、それぞれに人生のトンネルをくぐる経験を重ねながら、こうしたことを学ぶようにと期待されていると思います。しかしながら、私たちの実際はどうか。道を閉ざされ、足踏みする時、信仰者と言えど、意外なほど忍耐がない。目の前に困難があると、自分の解釈を加えて、後戻りしようとするのが何と多いのだろう。出エジプトの民を思い出してください。行く手を海に阻まれ、追い迫るファラオの軍勢におののきながら、彼らは叫んだ。エジプトで奴隷だった方がましだったと。また荒野で飢え乾いた時は、「エジプトの肉鍋」を恋しがる有様。信仰者と言えど、人という生き物は、困難の中、意外なほどに御霊の導きを求めようとはしないのです。

しかし本日の箇所は、そうした後ろ向きとは違う、別の生き方を私たちに励ましています。足踏みや挫折の中にも、実は聖霊が働いている。人の目には否定的と思える状況を通して、神は私たちを導いている。

一つのことを覚えたいのです。私たちの計画は、たとえ思慮深く準備されていても、御

心になんかかっているとは限らない。だから、道を閉ざされた時には、いよいよ御霊によって祈っていく。そんな忍耐と謙遜を、私たちは人生の旅路の中で身に付けていく必要があるのです。

人の努力や計画では、道が開かれないことがあります。しかし、閉ざされた時、それでも前を向き、御霊によって祈ることを思い出したとしたら、その人は幸いです。そして、そのように導きを求める人の目の前に、神は思いがけない道を用意してくださることでしょう。

3. マケドニアの叫び

9-10 節

「マケドニアに渡って来て … 助けてください」。これは、マケドニアの叫びと言われます。それは、真剣に人生の救いを求める、深い魂の叫びでした。

しかし、それにしてもマケドニアとは思いがけない場所でした。マケドニアは、パウロの滞在するトロアスから、海を渡った向こう、今のヨーロッパの入り口です。古い時代の文書には、マケドニアは野蛮な土地とあって、決して魅力的な場所ではなかった。しかし、そのマケドニアから聞こえて来た魂の叫びでした。

「聖霊はなぜ時に道を開かすのだろうか」。実はその答えがここにありました。それは、人には思いもよらない道を開くため。この叫びに答えて踏み出すパウロ一行の、この一歩を足がかりに、福音は世界へ広がっていくのです。そう、人の思いをこえた新たな道を示すため、神は時に、私たちの計画を止める。だから足踏みした後、もし道が開かれたなら信仰をもって応えたいと願います。そして私たちを導く神ご自身もまた、踏み出す私たちを励まし、支えてくださることでしょう。

10 節では、神の招きと信じて、速やかに一歩を踏み出していく。そんなパウロ一行の軽快なフットワークが印象的です。常日頃から導きを求め続ける人は、道が開かれた時には、このように軽やかに踏み出していくものなのでしょうね。

しかも、気づきましたか。導きに答えて踏み出した一行に、神は新たな仲間を加えてくださいました。10 節「パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちに」とありますね。これまで使徒の働きの中の文は、ずっと「彼ら」でした。それがこの 10 節から「私たち」と、いつの間にか気が付けば、一人称複数「私たち」になっていく。英語で We section と言います。控えめで目立たないけれど、誰かがここでパウロの旅路に加わったのです。誰なのでしょう。それは使徒の働きを記したルカその人でした。ルカは声高々に自分をアピールして加わったわけではありません。控えめに、目立たぬ形で加わった。しかしパウロにとっては、生涯の同労者ルカが加わった事は、百万の味方を得た思いであったでしょう。

目立たないながらも、海を渡る一歩を踏み出す時に、ちょうどその時に新たな仲間が加わっていく。これは人が演出できるタイミングではありません。これこそは、導きに答えた一行にエールを送っている。そんな神さまの粋な計らいであったでしょう。

台湾に渡って八年後によく開拓の道が開かれました。足踏みと思えた日々が、実は意味のある月日だったと後になって気づきました。八年の間、台湾の牧師たちと苦楽を共にし、

私自身が小さな同労者ルカになれたような気がします。八年の間に我が家の子どもたちも成長し、以前は家の事に忙しかった妻も、開拓のために多くの時間を使えるようになりました。私の妻は、教会の行う学童保育を通じ、貧しい家庭の子どもたちに聖書を教える働きを担いました。簡単ではない働きでしたが、「こんな働きがしたかった」と奉仕する妻は輝いていました。待つことにも意味があることを、私自身も学ぶことができたのです。

結論

道を閉ざす神は、新たな道をこうして開いていく。もちろん、開かれた道に踏み出した後、パウロは決して順風満帆の歩みを続けたわけではありません。16章以下の道のりが、むしろさらに険しくなっていくことは、皆さんもご存知だろうと思います。

しかし、これだけは覚えてほしいのです。神の導きに応える人生には、必ず喜びがあるのだと。「私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のを走り終え」た。パウロが、その絶筆、人生最後の手紙、第二テモテ四章で書き残していますね。神の導きに応じて踏み出す人生には「後悔」というものがない。マケドニアに踏み出した小さな一歩もまた、神の導きの中にある、意味ある一歩だったのです。

道を閉ざす神は、また道を開くお方であった。私たちも、そのように、御手の中にある人生を、今日も明日もひたすらに前に歩んでいきたいと願います。お祈りします。

私たちの人生を御手のうちに治める、天の父よ、感謝します。人生の山坂を越えてゆくには、決して足腰の強くない私たちです。どうか聖霊による執り成しとみ言葉の導きの中、いつも前を向き、あなたに信頼していくことができますよう、私たち杉並教会を守り導いてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン！